

# 第45回SCM現場研修

## 「共生社会と私たち～生野・釜ヶ崎の現場で学ぶ～」＜感想文＞

### 2023年2月～3月 全3回(ZOOM&現場)

2023年現場研修は、ZOOM2回、現場1回で開催されました。参加者は9名でした。

＜スケジュール＞

#### ■①2月27日(月)＜釜ヶ崎 ZOOM＞

司会・石村愛子

鈴木一弘委員長あいさつ／オリエンテーション

／研修生自己紹介

講演①生田武志「夜回りと生活困窮の現場から」

講演②大谷隆夫「釜ヶ崎のセンター問題について」

質疑応答／意見交換

#### ■②3月1日(水)＜生野 ZOOM＞

司会・鈴木一弘

講演③李根秀「在日コリアンのアイデンティティ」

講演④長崎由美子「朝鮮学校差別から見えるもの」

質疑応答／意見交換

#### ■③3月3日(金)

午前10時 JR 新今宮駅西口改札集合、

釜ヶ崎フィールドワーク(案内:大谷隆夫)／各自昼食ののち、午後1時半、JR 鶴橋駅北改札口集合／生野フィールドワーク(案内:李根秀)

夕方、KCC 会館(在日韓国基督教会館)でまとめの会、その後解散。

＜参加者＞

01 井口愛梨

02 中西美琴

03 橋本ゆい

04 濱端航大

05 辻戸美帆

06 熊谷静太郎

07 加藤克

08 鈴木理明

09 大和泰彦

＜企画運営：SCM現場研修実行委員会＞

鈴木一弘(委員長、学生YMCA)、飛田雄一(SCM協力委員会)、大谷隆夫(釜ヶ崎現場担当者)、李根秀(元研修生、KCC館長)、朴淳用(元研修生、神戸学生青年センター館長)、石村愛子(2021年研修生)、津村樹理(学生YMCA OP)

#### ●SCM 現場研修感想

#### 立命館大学産業社会学部 3 年生

#### 井口愛梨

今回の SCM 現場研修では、初日の生活保護に関する講演のみ参加した。大学 2 年生のとき、SCM 現場研修をゼミの担当教員に勧められたが、予定が合わず参加することができなかった。そのリベンジとして今年申込をしたが、就活の為に一日のみの参加になってしまったのが残念でならない。しかしこの一日の講演会だけでも非常に実のある話を聞くことができた。

まずホームレスに対して自分はまだまだ無知であったことに気づくことができた。都会の駅や繁華街に行くと大量の缶を持った高齢者を見かける。なぜ缶を集めているのか不思議でならなかった。だがお話を聞いたことで、空き缶を集めることが彼らにとっての収入であり、それだけではとても生活できるものではないことを知った。

また若者によるホームレスに対する暴力事件も話題に上がった。石を投げる、目をえぐる、灯油をかけ火を放つ。これらの暴力行為はホームレスへの差別的な考えに基づくものだ。だがこれらの暴力行為をしないと自分には潜在的にホームレスに対する差別心を持ち合わせている。これまで「ホームレスには近づくな」などの直接的な表現で親や教師に言われたことは無い。だが自主的にホームレスに対して視線を向けないようにし、距離をつめないようにしていた。これらの行為を在日コリアンや障がい者などにした場合、問題に

なる。にもかかわらず、ホームレスの場合は良しとされる。これこそ差別であり、自分は加害者側なのだ気づいた。

先日、友人と『ロストケア』という映画を見に行った。ある介護士が42人の高齢者を殺害し、その殺害動機を検察官が突き止める話だ。作中、検察官のセリフで「世の中には見えるものと見えないものがあるのではなく、人々が都合の悪い事実を見えているのに、目をそらしているだけなのかもしれない」という言葉がある。これは今回のSCM現場研修の開会の言葉に共通している。貧困を解決すべき問題であると認識し向き合うことができるのは、支援者が何か特別な能力があるからではなく、社会が目をそらしているだけ。私が空き缶集めをしている理由を知ろうとしなかったのは、見て見ぬふりをしていたからだといえる。

今回の講演会を通じて自分がどれだけ現場で起きている問題から目をそらしていたのかを自覚することができた。現場に行くことができなかつたのは残念だが、個人的に生野も釜ヶ崎も行こうと思う。そして来年こそはSCM現場研修に参加したい。貴重なお話を聞かせていただき、誠にありがとうございました。

## ●SCM研修を終えて

### 辻戸美帆

私は今回初めてSCM研修に参加し、これまで関わってこなかった事柄、関わろうとしてこなかった事柄に向き合うことが出来たのではないかと思う。

まず、事前学習では、様々な貴重なお話を伺っていく中で、私自身が、大阪で生まれ育ったことや、親からの影響もあり、知らぬ間に釜ヶ崎で野宿している日雇い労働者や、生野で生活されている在日コリアンの方に対する偏見を持っていることに気づいた。釜ヶ崎の例で言えば、親からは小さい頃から、「新今宮駅の高架下は危険だから絶対に1人で行ったらだめ」と言われていた。行ったことがないにもかかわらず「危険」と認識していたのである。在日コリアンについては、ほ

とんど知識が皆無であったにもかかわらず、漠然と偏見を持っていた。李根秀さんが仰っていた、「差別の根っこの部分には、知らない・出会っていないということがある」という出会いの大切さに関する言葉にハッとさせられた。将来、メディア関係の職に就こうと考えている私が、差別についてよく知らないで人に伝える仕事をしたかったというのにぞっとした。今回、このタイミングで研修に参加できて本当に良かったと思う。

現地での研修では、様々な差別の問題を、ほんの一部ではあるが、肌で感じる事ができたように思う。釜ヶ崎では、初めて野宿者の方々が生活されていらっしゃる所を拝見し、これまでの怖いというイメージはがらりと変わった。公園で将棋をしたり、仲間と談笑している姿を見て、コミュニティが確かに存在するということを知り、それと同時に、我々と何ら変わりのない普通の人々が、心無い差別を受けているのだと思うとやるせない気持ちになった。しかし、配布して頂いた資料を読んだり、井上さんからの貴重なお話を伺ったりしていく中で、「可哀想」という感情だけで終わらせてはいけないと強く感じた。個人的には、現状を的確に伝え、より多くの人に差別について深く知ってもらい、真剣に考えてもらう機会を設けることが大切だと思った。野宿者の中には、役所でひどい仕打ちを受けるから生活保護を受けに行きたくないという方もいらっしゃると思うが、ひどい態度を取る役所の方も、研修前の私と同様に「知らない」のだと思う。差別について考えていく上で、「知る」ということがどれほど重要か、知るために用いられるメディアが差別にいかにか大きな影響を与えているのかを改めて思い知った。

生野では、初めて朝鮮学校を訪れてみて、韓国語の授業は私にとっては新鮮であったが、その点以外は、ごく普通の小学校の光景が広がっており、子どもたちが直接差別を受けているようには感じられなかった。しかし、校長先生や長崎さんのお話を伺うと、歴史的な問題や日韓関係など様々な要素が複雑に絡み合ったうえでの深刻な差別があ

るということを知った。特に驚いたのは、朝鮮学校に対する国からの補助金がゼロであることだ。また、マスコミの悪意ある演出に関するお話も印象的であった。このような演出によって、無知な人であればあるほど、在日コリアンの方に対する悪いイメージを植え付けられてしまうと考えられ、ここでもまたメディアの恐ろしさを強く感じた。

三日間、貴重な経験ができて本当に良かったと思う。研修はもちろん、他の参加者との意見交換も有意義なもので、自身には無かった考えをたくさん得ることが出来た。研修前と後では、釜ヶ崎や在日コリアンの方に対する印象ががらりと変わったため、このようなコンテンツがもっともっと広まればよいと思い、そのことが差別を減らしていくきっかけに繋がると、私自身のイメージの変化からも感じた。メディア関係に就くことが出来れば、このような活動を的確に伝えられるように、さらに知識と考えを深めていきたいと思う。

## ●研修感想

### 立命館大学産業社会学部 2 回生

#### 熊谷静太郎

今回、SCM 研修に参加し、多くの学びを得ることができた。オンラインでの事前学習会（全 2 回）があったため、釜ヶ崎やコリアンタウン・朝鮮学校の現状を知識として頭に入れた後に、実際に現地に向かうことができた。事前学習で印象に残っているのは、「ルポ 最底辺」の著者である生田武志先生への「昨今、ホームレスなどの社会的弱者層に対して世間が自己責任論をぶつけている。これについてどのように考えているか、自己責任論はどこまで認められるべきか。」という質問をした際に返ってきた言葉であった。「社会は椅子取りゲームだ。椅子の数（仕事・社会的地位の数）に対して人間の数が多く、椅子が足りていないことが問題。貧困は社会構造の問題であって、個々人の努力の問題で解決できる問題ではない。」この言葉は、社会的弱者と強者の社会構造のとらえ方の違い、認知的格差の本質を突いた言葉だと感じた。自己責任論の蔓延は、過激な競争社会を醸

成するものであると感じた。

実際に、釜ヶ崎の閉鎖された労働センター周辺で寝泊まりする人々や、公園でワンカップ片手に将棋をする人々を見た。そこには、その人たちの生活や幸せがあり、過度に好奇心目で見ていた自分を恥じることに繋がった。最近は YouTuber が、頻繁に西成の様子をおもしろ半分で撮影することが増えているようだ。ホームレスという大きなカテゴリで人々を捉えるのではなく、そこには一人一人の生活者が日々を送っているのだと理解することが大切だと強く実感した。釜ヶ崎の様子は変わりつつある。福祉の街への変化だけではない。釜ヶ崎は外国人労働者の増加や、ホームレス排除への動きの活発化など、常に変化する環境に取り巻かれていることを念頭に入れ、これからも報道を通して注視したいと考えた。

大阪朝鮮第四初級学校に向かった際も同様に、カテゴリの怖さと愚かさを理解することとなった。一人一人に個性がある子供たちや先生が集まっている、一般的な小学校と変わらない様子がそこにはあった。できるだけ多くの質問をすることを心がけた。少しでも朝鮮学校について知り、それを誰かに伝えるときに困らないように、また、自分の学びを深めるために些細な疑問も伝え、丁寧な回答を得ることができた。そのような質問や会話、実際の学校の様子から朝鮮学校について知ったことで、世の中にある偏見や差別は、知ることと解消される部分もあるのではないかと感じた。しかし、人間がすべての偏見を取り払うことは難しい。また、「差別をしてはいけない」という意識を持つことはトルストイのシロクマ実験のように逆効果となることが指摘されている。自分とは環境が異なる人々との共生の難しさを思い知らされた。人間という社会的動物は共同体を作り、様々なカテゴリを形成して営みを送ってきた。「差別を辞めよう」「共生しよう」という単純な言葉だけでは解決できない複雑な社会構造があると感じた。

知行合一という言葉がある。この言葉のように、得た知識を自分の中に留めておくだけでなく、実際にその知識を生かした行動が取れるように、こ

れからの大学生活やその先の生活で何か学びを形にできるように、これからも積極的な学習を続けたいと考えた。来年度から、「あらたにす」という学生が主体のウェブサイトの記事を作成することになった。そのため、さっそく今回学んだことをアウトプットし、さらに深い学びに繋げていきたい。

### ●多くのことを学べる SCM 現場研修

#### 加藤克

今回の SCM 現場研修を受けて私は多くのことを知りることができた。二日間はズームによる講師の方の説明、最終日は実際にフィールドワークをして、釜ヶ崎やコリアタウン大阪初級第四朝鮮学校を訪れた。私は今までどのような問題が起きているのかあまり知らずにいた。しかし講師の方の話を聞いて実際に現状を見ることによって、理解することができた。あまり知らずに参加した私にとってこの SCM 現場研修は刺激的であり、多くのことを学ぶことができた。釜ヶ崎を歩いているときに、おじいさんに英語で話しかけられたのが一番印象に残っている。自分の存在が当たり前認められ、当たり前前の生活ができることに感謝したい。私たちが見てきた問題が、存在するというのを多くの人を知る必要があると感じた。YouTube など釜ヶ崎の問題などを取り上げたらいいと思ったが、町の人たちは動画の見世物にされるのは嫌なのだと聞いた。日雇い労働者や在日の方のような立場の弱い方たちを、守るのは現状を知って問題意識を持つことだと思った。また朝鮮学校は反日教育をしている、もしくはそれに似た教育を行っているものだと思っていた。しかし実際に校内を見て、授業に参加することでそのような情報はデマであったと分かった。一度 SCM 現場研修のようなものに参加すると、このような考えは無くなると思う。実際に自分の目で見て確かめることが大切なのだと思う。

今回の SCM 現場研修を受けて私は、実際に自分の目で見て多くのことを学び、今後の考え方に

大きく影響を与えることができたと思う。自分の知らない世界について詳しく知れた。同じような活動に興味がある友人がいたら、多くの人におすすめしようと考えた。関係者の皆様本当にありがとうございました。

### ●釜ヶ崎・生野を訪れてみて

#### 立命館大学産業社会学部現代社会学科メディア社会専攻 鈴木理明

私のなかで、「西成」と聞くと、友人やユーザーの影響からか、「治安が悪い、怖い人が多い」という印象があり、研修前も少しドキドキしていた。しかし、今回実際に現地へ赴き、人々が公園などで囲碁や将棋などをやりながら穏やかに暮らしていた光景を見ると、それまでの自分の印象が一変し、「怖い」「近づいてはいけない」というような雰囲気とは異なるものだと気が付いた。そのなかで、あいりん総合センターはそこで暮らす人々にとって、生活する上で非常に重要なものであると感じた。その建物を解体するということは、その人々の生活まで否定していることになるのではと感じた。行政などは組織としての利益を最優先として行動すると考えるため、人々の暮らしや人権などに対してあまり配慮していないのではないだろうか。人々が安心して暮らせることを最優先に考えるなど、利益に捉われない、多方面に配慮した政策を講じるべきだと感じた。

また、ホームレスの人々のなかでも、住居がある生活よりも仲間たちと屋外で過ごす方が良いという人がいるように、価値観は人それぞれで、多種多様であると考え。そのような人々を一括りに奇異の目で見て、自分勝手な都合で判断するのではなく、一人一人と向き合いながら支え合いのできる社会が実現してほしいと感じた。

そして、私は今回の研修で初めて生野を訪れた。私は元々在日コリアンの人々の暮らしやアイデンティティというものに興味があった。その中で今回の研修は自分の知らなかったことも知ることができ、非常に有意義な学びとなった。私は社会の「考え方」の形成には、メディアの影響が少な

からず関係しているのではないだろうか考える。テレビのワイドショーなどでは、朝鮮半島の問題が取り上げられることが多く、世間はあまり良いイメージを持つことがないのではないかと感じる。メディアは国際問題のよくない部分をクローズアップすることが多く、それが社会の在日コリアンの人々に対する偏見のまなざしを助長してしまっているのではないかと考える。実際に朝鮮学校を訪れてみて、子どもたちが一生懸命に授業に取り組んだり、サッカーをやったりする姿を見て、私たちと同じように教育を受け、生活をしているのだということを実感した。「偏見」のまなざしが向けられることによって、在日コリアンの人々が不自由な生活を強いられているという現状を知り、とてもつらい気持ちになった。使っている道具や設備が老朽化しているのを見て、まずは子供たちの教育環境を整えてあげることが先決だと感じた。民族に関係なく平等に教育の機会を提供することが実現してほしいと思った。

今回フィールドワークで釜ヶ崎や生野を訪れてみて、メディアや人を介してイメージするものと、実際に自分の目で感じたことでは大きく異なるのだということが分かった。メディアを学ぶ学生として、起きている社会問題を表面的に捉えるのではなく、ミクロの単位で人々の暮らしに注目し、起きている問題と向き合い、吟味していきたいと思った。

## ●スタッフより

### SCM 現場研修 感想

#### 石村 愛子

昨年の SCM 現場研修に初めて参加させていただき、今年はスタッフとして参加させていただきました。コロナが始まる前に参加を申し込んでいましたが、それが中止になってしまい、ようやく昨年参加できたものの3日間とも zoom での開催でした。去年研修を終えて、「とにかく現場に行きたい！」とばかり思っておりましたので、今年はずいぶん1日大阪の現場に行けるということで、開催がとても楽しみで仕方ありませんでした。

Zoom での研修は、去年はすべての時間に参加できたわけではありませんでした。けれど今年は最初から最後まで参加することができ、講師の先生たちの貴重なお話や参加者の皆さんのお話をすべてじっくりと伺うことができました。初めて聞くお話、そして昨年聞いたけれども新たな発見や気づきがあるお話にとっても勉強になり、色々なことを考えさせられました。

そして最終日の現場研修は、釜ヶ崎と生野の半日ずつの研修という短い時間でしたが、実際の現場に足を運んで、お話を伺うことができ、やはり zoom 越しのお話だけでは得ることができない、とても大きな学びを得て帰って来ることができました。

私は今、たまたま幸いなことに住む家があり、仕事があり、頼る家族があり、そして健康でいます。出自によって差別された経験ありません。平和で豊かな日本の中で暮らしてきて、野宿者の人に対して、恥ずかしながら私も大きな偏見と誤解を抱いて生きてきました。そして、この現代日本にあって、在日コリアンの人たちがどのような経験をして、どのような思いを抱きながら日本の中で暮らしてきたかを全く知らずに生きてきました。そのような差別があることすらほとんど知らずに生きてきた愚かな人間でした。

今回釜ヶ崎と生野を知るという経験を通して、私は社会を、世界を見る目をより深くすることができました。私たちが生きる世界は依然として、健全な、あるべき姿には全く程遠いのだということに非常に痛感させられました。

私は一人のキリスト者として、痛みや孤独、苦しみを抱く人たちといつも共にいることができる人間でありたいと思っています。そのためには、まだ色々なことに関する知識、学び、経験が全然足りていないということも、今回の研修を通して痛感させられました。

正直言って、現場を半日廻った程度では、ほとんど私はまだ現場を知ることができていないように感じます。今回の研修で得た学びをこれで終わりにするのではなく、これからももっと学びを深めていきたいと思いました。

私は今関東に住んでいるので、釜ヶ崎に行くことはなかなかできませんが、今度ずっと行こうと思っていた山谷地区での教会の活動に参加してみようかと思っています。朝鮮学校にも折を見て伺うことができたら、と思っています。何が今の自分にできることなのか、を模索しながら、これからも関心を持ち続けて生きていきたいと思っています。この現場研修は私の人生の中でも、本当に意義深い経験になりました。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださいました実行委員会の皆様、貴重なお話をしてくださいました講師の先生の皆様、そしてほんこつ司会者の私を優しく受け入れてくれて、たくさん学びの機会を与えてくださり、共に素晴らしい時間を過ごしてくださいました参加者の皆様に、心より深く感謝いたします。本当にありがとうございました！

## ●スタッフより

### 第45回 SCM 現場研修を終えて

大谷隆夫(釜ヶ崎現場担当)

2020年1月から日本国内でも始まった、新型コロナウイルスの感染が続く中行われて来たSCM 現場研修の積年(?)の課題は、少しの間でも良いから、釜ヶ崎、生野の現場を実際に研修生に体験してもらうにはどうしたら良いのかということでした。

そういった意味では、今回、かなり絞った形ではありましたが、釜ヶ崎、生野の現場を研修生に実際に体験してもらったのは改めて良かったと思っています。

話は少し変わりますが、「Simple is best. (シンプル・イズ・ベスト)」という言い回しがあります。直訳すると、「何事も単純素朴であることが最良である。」という意味になると思いますが、世界中で読まれている小説『星の王子さま』の著者・アントワーン・ド・サン＝テグジュペリ(1900～1944)は、「何事も単純素朴であることが最良である。」という意味に通じる言葉として、次のような言葉を残しています。

「完璧とは、付け加えるべきものがなくなった時ではなく、取り去るべきものがなくなった時のこと」

又、イタリアを代表する芸術家であった、レオナルド・ダヴィンチ(1452～1519)も「何事も単純素朴であることが最良である。」という意味に通じる言葉として、「シンプルさは究極の洗練である。」という言葉を残しています。

SCM 現場研修はかつては、1週間泊まり込みで、釜ヶ崎と生野の現場を体験し、各現場で、講師の人たちから話を聞き、それについて議論し、交流しという内容で行われて来たわけですが、そういった意味では、今回の第45回SCM現場研修は、今まで、行われて来た現場研修の中では、一番シンプルな形態であったと思います。要はこの「シンプルな形態」をどう考えるかということですが、直接的な原因は、新型コロナウイルスの感染が、「シンプルな形態」を取らざるを得なくさせたにせよ、先ほど引用した、アントワーン・ド・サン＝テグジュペリや、レオナルド・ダヴィンチの言葉で明らかにされているように、「シンプルな形態」そのものに積極的な意義を認め、新型コロナウイルスの感染が収束したから、元のSCM 現場研修の形態に戻すのではなく、新しい形態のSCM 現場研修を模索していかねばならないのではないかということ、改めて思わされています。

■付録(「関西労伝 60年の歩み—イエスが渡すあなたへのバトン」2017.4、かんよう出版、より)

「SCM現場研修(生野・釜ヶ崎)のあゆみ」

SCM協力委員会主事 飛田雄一

<SCM現場研修のはじまり>

SCMは、Student Christian Movement、キリスト教学生運動。サプライ・チェーン・マネジメント(supply chain management、供給連鎖管理)ではない。戦前は、社会的キリスト教運動としてのSCMがあった。その歴史も学びたいと思っている。

S C Mそのものは、残念ながら戦後活発であったとは言えないが、一九五〇年代からS C M方策委員会が新しい活動を模索していたようだ。一九七〇年代にS C M協力委員会が、学生Y M C A、聖公会S C A、早稲田奉仕園、神戸学生青年センター、名古屋学生センターなどによってつくられていたが、現場研修という新しい試みが、一九七九年よりスタートした。

第1回（一九七九年三月）現場研修の「趣意書」は、以下のとおりである。



かつてS C M指導者会議をつくり、教会形成と伝道にとりくんでいたS C M協力委員会は、七〇年代に入ってから、聖研ゼミナールやキリスト教セミナーと、試行錯誤をくりかえす中で、その方向性を探ってきた。キリスト教学生運動の関連団体の連絡と交流にとどまるのか。それとも、もうすこしやれるのか。

ここに新たに現場研修を企画して、私達は将来への一つのステップを踏み出す。みんなに共通に理解されるはずの言葉の、その前提が失われ、あるいはプログラムが一人歩きし、また、アジアの私達にとっては、演繹的なドグマでしかない既存の進学への不信にみちた現況がある。その状況に対して、私たちはどこから言葉を発し、日々の対話と実践をつくっていくのか。

そのことの行われる場を、私たちは「現場」と名づける。しかり、日常生活の中に「現場」どのように意識化していくか・

そのための視座を互いに獲得していく契機をつくること、この現場研修に目的である。現代社会の矛盾が鮮映に表れている「現場」、様々な学生・青年が、そこでの共通体験をふまえつつ言葉をブツケ合いさぐりあっていくときに、キリスト教学生運動が、また青年運動が、社会の中に、新たな展開をもって、着実に根を下ろしていくことを私たちは確信する。そのための第一歩を踏み出す。一九七九年二月一日 S C M協力委員会



主催者の意気込みが感じられる文章である。日程は、三月二五日から三一日。初日はK C Cで呉

在植さんの記念講演も行われた。プログラムはその後五日間、生野・釜ヶ崎に分かれて労働体験等を行い、最後の三日間は六甲Y M C Aでまとめの会が開かれた。募集人数は、生野・釜ヶ崎各一〇名の二〇名。予想を超える反応があり、応募者は三〇名ほどあった。その中から提出していただいた作文等により二〇名を選考したことを覚えている。

実行委員長は、当時神戸学生青年センター館長の小池基信、委員には、関本肇、小柳伸顕、李清一、佐藤与紀、武邦保、千葉宣義、中原真澄、飛田雄一が名を連ねている。

全体で六泊七日というタイトなスケジュールだったが、研修生たちは熱心に参加した。最終日の六甲Y M C Aでのまとめの会では、シニアが退場を命じられて研修生だけの会も開かれた。

<学生・青年主体の現場研修へ>

一九八〇年の二回目以降は、S C M協力委員会が主催者であることに変わらないが、研修生が次回現場研修の運営にかかわる体制ができてきた。第一回、第二回参加の梅崎浩二が数年実行委員長を務めた。

二〇一六年三月の第三八回現場研修までの研修生の総数は五〇〇名を越えていると思う。そのすべてを紹介することはできないが、その一部を紹介する。（名簿の残っていない年もあり、特に恣意的に選択している訳でもありません。私の名前がないと怒らないでください。でも飛田hida@ksyc.jpまでご一報ください。）

瀬口昌久、坪山和聖、梅崎浩二、角瀬栄、倉本由美子、香川博司、藤原羊子、李相ホ（かねへんに高）、恵大一郎、石居盾夫、川田靖之・千秋、横山潤、石井智恵美、後宮俊夫、西岡昌一郎、中西昌哉、伊藤史男、小笠原信実、望月智、木谷英文、今井牧夫、成田信義、西岡研介、吉沢託、李明生、黒瀬拓生、西中誠一郎、川上信、竹内富久恵、辻早苗、李サ（さんずいへんに少）羅、金一恵、東島勇人、川村直子、大前信一、朱文洪、片田孫朝日、西川幸作、中村香、村上恵依子、鍋島祥郎、清水のぞみ、森恭子、鍋谷美子、藤室玲治、福本拓、山本知恵、山田拓路、浅海由里子、今井

牧夫、門戸陽子、宮城かおり、横山順一、内田美紀、バナジー ジョティ 千歳 サラフィーナ、村瀬義史、朴淳用。

研修生が現場研修を運営していくという体制が組めない時期もあった。六泊七日という長い研修の期間を短縮する、生野・釜ヶ崎を同時並行ではなくて、すべての研修生がすべて同じスケジュールで生野・釜ヶ崎で学び、KCCでまとめの会を開くというスタイルに変わってきている。五名から一〇名の研修生が参加するという状況が長く続いたが、二〇一五年（第三七回）には、過去の研修生の口コミが広がって一五名の参加者があった。毎回、現場研修のなかで公開講演会が開かれているが、その講演者には、元研修生の叶信治、山田拓路らが登場している。

生野・釜ヶ崎の現場では、金成元、呉光現、薄田昇、小柳伸顕、大谷隆夫らが現場スタッフとして参加している。



SCM現場研修は第一回を生野・釜ヶ崎で開き、第二回を農村で開く計画もあった。現場研修には、

課題をもってそこで働いている人との連携が重要である。重要であるという以上のその人がすべてであるといっても過言ではない。そういう現場であるからこそ現場研修が可能なのである。SCM現場研修は、生野・釜ヶ崎という現場で、現場で働く人との協働で開催できているのである。

当初、YMCA同盟におかれていたSCM協力委員会事務局は、その後、名古屋学生センター、神戸学生青年センターと移り現在に至っている。委員長は、第一回現場研修（一九七九年）の時は、関本肇、その後、李清一、野村潔、そして現在は金成元が担っている。（※現在の委員長は別項に）

先の元研修生のリストを見ても、SCM現場研修を体験した人々が現在もいい働きをされている。生野・釜ヶ崎という現場で学んだ彼／彼女らが、新しい自分の現場を見だしその現場で働いているのである。現場は、現場で働く人の姿は、新しい現場、新しい働き手を生み出す唯一の源であるかもしれない。※

-----  
<編集後記>研修生のみなさん、ごくろうさまでした。今年も実りの多い研修ができたことを喜んでいきます。コロナ下ですが、今年は、一日だけでしたらフィールドワークを実施しました。／ZOOMで講演して下さった講師の方々、フィールドワークで現場を案内して下さった方々、ありがとうございました。／付録として関西労働者伝道委員会の『労伝 60 年史』2017 より、飛田の「SCM現場研修（生野・釜ヶ崎）のあゆみ」を再録しました。SCM現場研修の歴史を知る一助になればと思います。

2023年11月 SCM協力委員会主事・飛田雄一

-----  
第45回SCM現場研修「共生社会と私たち～生野・釜ヶ崎の現場で学ぶ～」<感想文>

2023年2月～3月 全3回（ZOOM&現場）

-----  
2023年11月3日発行

編集・発行 SCM協力委員会（委員長・鈴木一弘）

〒657-0051 神戸市灘区八幡町 4-9-22 神戸学生青年センター内

TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019

郵便振替<01180-2-58517 SCM協力委員会>

ホームページ <https://ksyc.jp/scm/> e-mail [hida@ksyc.jp](mailto:hida@ksyc.jp)